

## ■ 書 評



## 妄想の臨床

鹿島晴雄・古城慶子・古茶大樹・針間博彦・前田貴記 編  
新興医学出版社  
2013年6月 500頁  
本体価格 7,000円+税

本書は精神科症候学の中心ともなるべき妄想についてのモノグラフである。A5判縦書きで500ページ続く堂々とした体裁である。慶應義塾大学精神科精神病理グループを中心とした延べ40人余りの著者が、妄想のさまざまな側面を多様な切り口から議論している。

近年はこのような精神症状について真正面から議論する本は少なくなった。思えば一昔前までは、このような精神病理学のモノグラフは出版される機会も多く、精神病理学を専門としなくとも、臨床に携わる精神科医であれば購入して勉強したものである。本書の体裁はまさにそのころの出版物を彷彿とさせる印象がある。最近はやりのハウツー的な解説書とは一線を画した硬派のモノグラフである。それでは本書では妄想について、高踏かつ難解な精神病理学的な「深読み」や「解釈」がなされ、一般の精神科医には読み続けるのがつらくなるような記述が続くかという、そうではない。あとがきに編集を代表して古茶が述べているように、本書での議論はあくまで臨床に役立つかどうかという視点で書かれている。あえて了解概念を超える哲学的な議論が避けられているのは、操作的診断に慣れているが、症候学そのものは苦手な若手精神科医に向けてのことであろうか。

本書は大きく3部に分かれている。第1部は総論に相当する。従来の記述精神医学を中心とし、妄想概念の歴史や、妄想についてのさまざまな学派の考え方が紹介されている。ドイツ語圏における妄想の記述現象学的な記述も紹介されている。評者の世代はここをきっちり教育されたはずである。しかし妄想気分、妄想知覚、妄想着想などの用語について、評者はどうも曖昧に使っていたことが判明した。冷や汗ものである。一方、仏語圏からはパラノイアが話題にされ、英語圏ではDSM-IVの操作的診断基準における妄想の定義が詳述されている。DSM-IVの統合失調症の診断基

準では、「奇異な妄想」が重要視されているが、この「奇異」の意味が詳しく説明されているのが興味深い。というのも、DSM-5からは妄想からこの「奇異」が除かれてしまったからである。DSM-IVまでは重要視されていたシュナイダーの一級症状についても、現在の時点で再考されている。敏感関係妄想やパラノイアなどは、最近話題になることが少ないようである。しかし、精神科医として臨床を積み重ねていけば、これにあてはまる症例を少なからず経験するはずである。本書ではこれらの典型例が提示されており、読者が経験したことがあればその症例と比較することができる。

各論に相当する第2部ではライフステージごとに妄想が論じられているのが特徴である。ここではさらに子ども、青年期、青壮年期、初老期および老年期に分けられている。子どもの妄想としては、imaginary companionが紹介され、青年期では村上らによって提唱された思春期妄想症、解離性障害や自閉症スペクトラムにおける妄想、さらに摂食障害におけるボディイメージの障害が認知機能との関連で論じられている。青壮年期では、中安の提唱する初期統合失調症から始まり、妄想型統合失調症、非定型精神病、躁うつ病、境界性パーソナリティ障害、中毒性精神病、てんかん精神病と続き、これらの疾患でみられる妄想が論じられている。老年期では、退行期メランコリー、コタール症候群、嫉妬妄想、遅発パラフレニー、皮膚寄生虫妄想、共同体被害妄想、認知症、器質性脳障害、カブグラ症候群などが話題として提示されている。評者には名前だけで内容までは詳しく知らないいくつかの項目があり、熟読した次第である。以上を概観してみると、いかに妄想が多様な疾患で出現し、またその形式も内容もさまざまであることがわかる。妄想そのものを取り上げるだけでも、これだけの豊かな議論となるということは、精神医学とはなんと奥深いものであろう。以上の第1部と第2部が事実上本書のほとんどを占めている。最後の第3部では治療論として、薬物療法だけでなく認知行動療法なども紹介されているのが興味深い。

一度に読み通せる本ではないが、各章は10ページほどなので、少しずつ読み続けていくにはちょうどよい分量である。予備知識がないとまったく歯が立たない難解な議論がなされている章は多くない。妄想の多様性をこれから経験するはずの若手精神科医に対してだけでなく、精神症候学をもう一度きちんと学び直したい中堅以上の精神科医にも推薦したい一冊である。

(仙波純一)